

教職科目における自他評価システムの活用

—教職への適性判断、話す力・伝える力の向上のために—

准教授 中川 賀 照

Nakagawa Yoshiteru

要 旨

本学の特色の一つとして、中学校美術教員の免許取得を挙げることができ、これは入学希望者や保護者にとって大学を選択する際の大きな判断基準にもなっている。しかし、2年間で、本課程の上にさらに教職科目を修得することは容易ではなく、本人の強い動機とモチベーションが必要である。この研究は、教職に関する科目の中に自他評価システムを取り入れることによって、自らが教職に対する適性を判断できるようにするとともに、教員に最も必要な話す力や伝える力の向上を図ったものである。

キーワード：自他評価システム、美術科教育法、教職実践演習、話す力、伝える力

1 はじめに

平成24年度現在、短期大学で中学校二種の美術教員の免許を取得できる学校は、全国に14校（表1）あり、本学も学校の特色の一つとして挙げている。今年度、本学を受験する際に重視した点として入学生にアンケートした結果、「学費が安い」54%、「自然や文化財がある環境」50%、「自宅から通学できる」46%、「よい先生がいる」44%、「学習内容がよい」42%、「学生の作品がよい」41%、「専攻科への進学や4年生への編入」29%、「施設設備の充実」29%、「**教員免許の取得ができる**」22%と答えており、実際に年度当初は約20%の学生が教職を履修した。

しかし、教員免許の取得には、通常の卒業に必要な68単位に加え、「教職に関する科目」21単位、「教科に関する科目」4～10単位（コースによって異なる）、「教科または教職に関する科目」2単位、「教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目」2単位、「教職実践演習」2単位の併せて31～37単位の他、「介護等体験合同オリエンテーション」1日、「介護等体験事前指導」1日、「介護等体験」7日、「教育実習事前指導」1日、「教育実習」4週間、「教育実習事後指導」1日等、多くの単位等を履修する必要がある。また、本課程との関係で、教職に関する授業の大半は5限目（16:00～17:30）に行われるうえ、教育実習期間中に欠けた授業の補講も土曜日の午後等に実施しなければならない。さらに本学では実践的な力を重視しているため実習が多く、他の学生と同等の課題を要求される。

以上のようなことから、免許取得には相当に強い意志が必要である。「取れるなら取っておこう」といった安易な考え方や、保護者の要望が動機であったりすると、途中辞退に至ることも少なくない。本学においては、取得する動機の確認や、いかに2年という短期間で実践的な知識や技能を効率的に身に付けさせるかが重要な課題となっている。

そこで、演習ではできるだけ発表等の機会を多く設け、話す力や伝える力を向上させること、発表時の相互評価によって各自が自分の課題を見つけられるようにすること、さらに教職に対する適性を自発的に判断できるようにすることなどを目的として、「自他評価システム」を取り入れた。

表1 中学校美術二種免許状 (短期大学卒業程度)

文科省HPより 2012年度

No.	都道府県名	国公私	大学名	学科等名	専攻等名	入学定員
1	北海道	私立	札幌大谷大学短期大学部	美術科		90
2			文化女子大学室蘭短期大学	コミュニティ総合学科		70
3	福島県	私立	郡山女子大学短期大学部	生活芸術科		30
4	群馬県	私立	桐生短期大学	アート・デザイン学科		60
5	東京都	私立	女子美術大学短期大学部	造形学科		250
6			東京家政大学短期大学部	服飾美術科		70
7	神奈川県	私立	横浜美術短期大学	造形美術科		300
8	愛知県	私立	名古屋造形芸術大学短期大学部	造形芸術科		80
9	大阪府	私立	大阪芸術大学短期大学部	デザイン美術学科		140
10	兵庫県	私立	夙川学院短期大学	美術・デザイン学科		80
11	奈良県	私立	奈良芸術短期大学	美術科		130
12	広島県	私立	比治山大学短期大学部	美術科		70
13	山口県	私立	山口芸術短期大学	デザインアート学科		50
14	大分県	公立	大分県立芸術文化短期大学	美術科	美術専攻	25
					デザイン専攻	50

2 研究目的と方法

- (1) 教職課程における「自己評価システム」の有用性について、2つの教職科目により検証する。
- (2) 「自己評価システム」の改善と、今後の活用方法について考察する。

3 研究内容とその結果及び考察

(1) 教職科目における自己評価システムの有用性

ア コミュニケーション能力と話す力・伝える力

昨今、コミュニケーション能力の重要性が語られる機会が増えているが、コミュニケーション能力とは、他者とコミュニケーションを上手に図ることができる能力である。それには、相手の伝えようとしている意味を受け取れているかを常に自分に問いかけながら、理解した内容を反復したり、相槌など相手の反応を見ながら修正を加えたりすることを繰り返し、それによって信頼関係が徐々に生まれてくるようになる。

新学習指導要領では、言語に関する能力の育成をあらゆる教育活動の場面を通して行われることが求められているが、「話す」や「聞く」、「伝える」、「伝え合う」などの基本的な活動が、コミュニケーションを図るうえで重要なポイントになっているからであろう。教員にとっても、この言語に関する能力が最も重要で、分かりやすく話す力や自分の考えを伝える力が様々な場面が必要となる。そのため、教員養成課程においてもそれらの力を育成する仕組みを取り入れる必要があると考えた。

話す力の向上には、声の大きさや早さなどの話し方に関する力を伸ばすこと、言いたいことを簡潔にまとめる力を付けることが大切である。また、伝える力の向上には、相手との距離や周りの状況などの判断、相手に自分の伝えたいことが通じているかなどを読み取る力を鍛える必要がある。

そのためには、実践的な経験を積み重ねられるようにする必要があり、2年という短期間での効率的な育成方法の開発は、教科に関する学習と同等以上に重要な課題であると考えた。

以下に、私の担当している教職に関する科目等の中に取り入れた「相互紹介」や「自己評価システム」と、それらの効果について考察していきたい。

イ 「美術科教育法」への「相互紹介」の導入

授業や集まりの最初に、自己紹介を取り入れてるところは多い。互いの人柄を知ること、その後の集団活動を円滑に行えるようにすることなどが目的であるが、私の場合は二人一組で行う「相互紹介」という方法を用いている。これは、短時間で互いの特徴を知ることができるだけでなく、相手の好ましい所や特技などを取り上げて紹介しようとする傾向が自然に生まれ、全体の場の雰囲気が和らぐとともに、友好的な関係でのスタートが期待できる方法である。(資料1)

資料1

○相互紹介プリント

自己プロフィール	氏 名	印象等
フリガナ 1 氏名 () 2 出身 (都道府県) (学校) 3 自己PR 4 受講した理由 5 こんな先生に教えて欲しい		
他者紹介用メモ		

《 進め方 》

- ① 二人一組になり、互いに紹介し合う。(相手のメモを取ってもよい) … 5分間
- ② みんなの前で、パートナーを紹介する。… 1分間
- ③ みんなは、紹介を聞きながらその人の印象をメモする。

①の活動では、みんなに紹介できる内容を聞き出そうとする姿勢が大切で、相手と自分との違いに気づくこと、自分にはない相手の良さを知ること、自分のことを知ってもらおうと努めることなどに気をつけるようにする。

②の活動では、紹介する人の特徴についてまとめる力、分かりやすくみんなに伝える力が必要であるが、実践ではこれらの力以外にも聞き手に好印象をもってもらえるように紹介しようとする姿勢を見ることができた。

③の活動では、聞き取る力を高めることが目的である。紹介は、紹介者の主観や価値観を通して行われるので、紹介されている人の反応を見ながら客観的に判断し、その人の印象を記録していくようにする、また魅力的な手法を自分の紹介の中に取り入れるようにする様子が見られる。

ウ 「美術科教育法」への「自他評価システム」の導入

1回生の前期に実施する美術科教育法では、教育課程の意義及び編成の方法、及び各教科の指導法、教育の方法及び技術等（情報機器及び教材の活用を含む）について学習し、学習指導要領中学校美術を教科書として用い、それらの理解を図るとともに、実際に美術の授業を展開できるようになることを目標としている。

主な内容は、自らの目指す教師像を明確にすること、現時点で身に付いているスキルを確認すること、学習指導要領に沿った指導案を作成できること、模擬授業を通して指導に必要なスキルを身に付けることなどであるが、「自他評価システム」をその中の3つの場面で導入した。

第1回目は、中学校学習指導要領の「美術科の目標」について学習する場面で、内容を説明した後、自分なりの要約を行い、それを発表するという流れである。これは、発表スキルの向上とともに学習内容の定着化をねらいとしている。

2回目は、同じく学習指導要領「美術科の内容」での内容の理解と定着を図るためのもので、一定の割り当てられた範囲を、各自が自分の言葉で説明する。学習指導要領に使われている文章や表記に慣れることも、目的の一つである。また、単なる丸暗記ではなく自分なりの解釈で他人にかみ砕いて説明することにより、知識の深化と定着化をねらっている。

3回目は、学習指導案を作成する場面で行った。3～4人のグループに分かれ、学習指導案を完成させる。一人では、それまでの体験や経験だけが頼りとなってしまうので発想が広がりにくい。グループ協議による「3人寄れば文殊の知恵」効果の期待である。

a 「自他評価シート」の使い方

資料2は、「自他評価」の際に用いたシートで、次のような手順で行う。

- ① 数名のグループに分かれ、発表時に気をつけたい点について話し合い、3つずつ板書する。
- ② 意味の近いもの同士に分け、全員で3つのポイントに絞る。
- ③ 発表では、それらを意識してするようにし、各ポイントについて自分も含めて5段階で評価する。

今回は、気をつけるポイントとして、「聞き手の様子を、よく観察しながら話す」「聞き取りやすいように、抑揚をつけて話す」「自分自身が、内容をよく理解して話す」の3つに決まった。

資料2		自他評価シート			氏名()
※5段階で判定してください。					
	コース	氏名	発表時に気をつけるポイント		
			聞き手の様子を、よく観察しながら話す。	聞き取りやすいように、抑揚をつけて話す。	自分自身が、内容をよく理解して話す。
1	洋画	〇〇 〇〇			
2	日本画	〇〇 〇〇			
3	陶芸	〇〇 〇〇			
~~~~~					
19	デザイン	〇〇 〇〇			
20	染織	〇〇 〇〇			

b 「自他評価シート」の集計と返却

全員の発表が終わったらエクセルで集計し、その結果を個票にして学生に返却する。その際、評価システムの趣旨や数値の見方を説明するとともに、自己改善への意識をしっかりとらせるために「分析と今後の課題」欄への具体的な記入を指示する。

資料3は、3回目までのときの個票であるが、1・2回目の「分析と今後の課題」を差し込み印刷でプリントされるようにし、これまで立てた目標の達成度を確認できるようにした。

資料3

**発表するときに気をつけたいポイント**

氏名 ○ ○ ○ ○

※ この自己評価集計結果は、みんなの評価と自分自身が行った評価とのずれを知ることによって、改善すべき点を具体的にしていこうというものです。有効に活用してください。

	1回目	2回目	3回目	自分への評価の平均		
○ 全体がつけた評価の平均	3.1	3.1	3.3	1回目	2回目	3回目
○ 各自がつけた評価の平均	2.3	2.4	2.7	2.4	2.7	3.9
○ 自分がつけた評価の平均	3.3	3.5	2.8			

<b>1</b>	<b>聞き手の様子を、よく観察しながら話す。</b>	評価の平均点	2.8	2.9	3.1
	・あなたへの評価の平均	2.3	2.5	5.0	
	・あなたが全員につけた評価の平均	3.3	3.2	2.5	
	・あなたが自分自身につけた評価	2.0	3.0	2.0	
<b>2</b>	<b>聞き取りやすいように、抑揚をつけてしっかりと話す。</b>	評価の平均点	3.2	3.2	3.4
	・あなたへの評価の平均	2.7	2.9	4.0	
	・あなたが全員につけた評価の平均	3.8	3.8	3.2	
	・あなたが自分自身につけた評価	3.0	3.0	3.0	
<b>3</b>	<b>自分自身が、内容をよく理解して話す。</b>	評価の平均点	3.2	3.2	3.4
	・あなたへの評価の平均	2.3	2.6	3.7	
	・あなたが全員につけた評価の平均	2.8	3.7	2.8	
	・あなたが自分自身につけた評価	2.0	2.0	2.0	

**1回目の分析と今後の課題**

全体として、自己評価より高くなっていますが、項目1の部分がやはり低く、これは思い出すことに必死になり周りを気にする余裕がないことが理由で、もっと内容を把握して発表に臨むべきと思いました。

**2回目の分析と今後の課題**

前回の反省について、数値の読み方の間違いにより、見当が外れており、前回と今回を通していえるのは、全体的にあがったものの中の下であるということです。項目2に関しては、おそらく抑揚が少ないことが原因と思われ、また、前回と同じく内容を暗記ではなく、理解して発表に臨まなければならないと感じました。

**3回目の分析と今後の課題**

総じて上がっていたことが素直に嬉しく思います。内容の理解に関して、自分の中でかみ砕く作業が足りなかったことが問題と感じています。

### c 評価の分析

グラフ1「評価の推移」は、1回生前期の「美術科教育法」で行ったものである。この評価の推移と、表2「分析と今後の課題」の記述内容を基に、学生たちの学習状況について分析していきたい。

グラフ1から、全体の評価の平均は、1・2回目が3.1で3回目は3.3と全体のスキルが上がっていることが分かる。

1回目と2回目を比較すると、評価が「上がった」52%、「下がった」27%、「同じ」14%、「欠席のため不明」5%で、「下がった」と「同じ」を合わせると41%もいる。

そこで、表2への記入内容を調べてみた。すると、「下がった」や「同じ」の約7割の者の記述が、自分の発表の様子をしっかりと把握できていないことが分かった。感想文のようなものや、単なる分析のみに終わっているものが多いのである。

そして、記述に具体的な課題を書いている者の内、約5割の者の評価が上がっていることも分かった。

これらを踏まえ、2回目の返却時には、改善のための具体的な目標や方策を記入するように指示した。

その結果、2回目から3回目への変化では、評価が「上がった」67%、「下がった」14%、「同じ」0%、「辞退のため不明」19%であった。そして、「下がった」3名の内2名は、その後に教職を辞退している。

表2のゴシック体で表した箇所は、改善のための具体策と思われる記述で、アンダーラインの部分は効果が顕著に現れていると思われる箇所である。

評価が上がった者の中で、具体的な対策を記入した者（ゴシック体）は93%もあり、学習の振り返りと改善のための課題設定の重要性が明らかになった。また、3回目の評価が飛躍的に伸びた者が多くいるが、このタイミングでの適切な指導の必要性を強く感じる。グラフで見ると、R、I、O、G、Q、Bがそれに当たり、2回目から3回目への伸びの大きさが特徴的である。

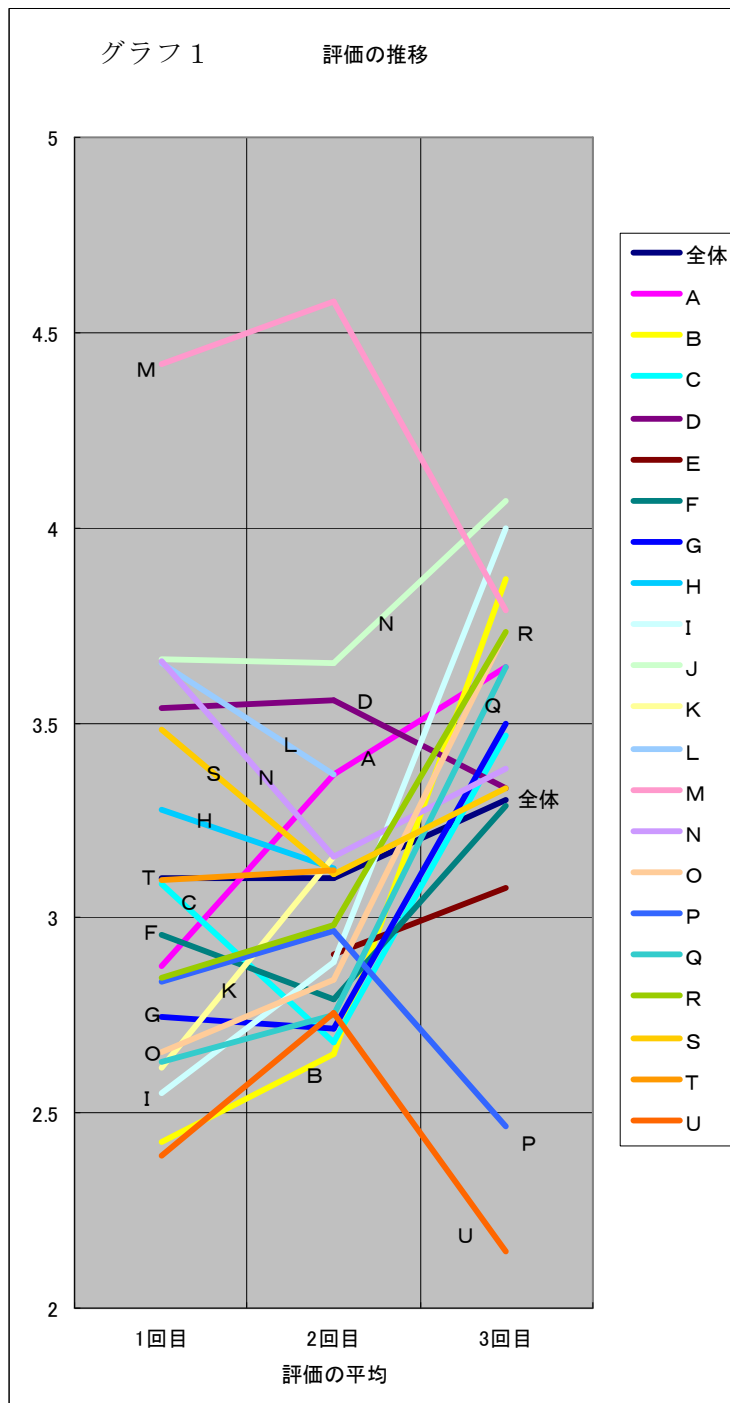


表 2

## 分析と今後の課題

	1回目	2回目	3回目
A	2.9 1, 2については、全員の評価に対して少しだけ自分の評価が低い。3は、自分が思うより全員の評価が平均と同じになっている。2, 3は、全体の平均点と同じくらいだが、1が特に低いので、1の項目に気をつけて話す。	3.4 全体的に評価が上がっていますが、1がまだ低いので、伝えたい内容を覚えて、それをイメージしながら相手一人一人の顔を見るようにして話す。	3.6 聞き手の様子の項目が向上していたが、もっと余裕を持って話せるようにしたい。
	2.4 全体として、自己評価より高くなっていますが、項目1の部分がやはり低く、これは思い出すことに必死になり周りを気にする余裕がないことが理由で、もっと内容を把握して発表に臨むべきと思いました。	2.7 前回の反省について、数値の読み方の間違いにより、見当が外れており、前回と今回を通していえるのは、全体的にあがったものの中の下であるということです。項目2に関しては、おそらく抑揚が少ないことが原因と思われ、また、前回と同じく内容を暗記ではなく、理解して発表に臨まなければならないと感じました。	3.9 総じて上がっていたことが素直に嬉しく思う。内容の理解に関して、自分の中でかみ砕く作業が足りなかったことが問題と感じている。
C	3.1 人に対する評価をつけるときは、少し高めにつけてしまう傾向があり、自分自身の評価は、大幅に低くつけてしまう傾向がある。周りの評価と自己評価の大幅な数字の差があり、自分をまだ十分理解できていないところが目立つ。	2.7 自分が理解したつもりだった内容が、他者にはわかりにくい内容、話し方であったのだとわかることができた。次回からは、分かり易い話し方、聞き取りやすい話し方を組み込みながら説明ができたと思う。	3.5 評価点は上がってきたが、自分自身としては内容理解と相手の様子をよく観察しながら話すということが、他と比べて足りていないと感じるので、事前に内容をよく理解し、自分なりのまとめを作り、自分の全力を出し切れるように事前準備をよくしておきたい。
	3.5 全体として自己評価点より、全員の評価平均点が高く、自分を厳しく評価していることがわかりました。聞き取りやすく、抑揚をつけて話すことが特に高いので、これは自信をもっていいと思いました。	3.6 2回目では、1回目と変わらない結果になりました。悪くはないですが、良いともいえないので評価が低い「聞き手の様子を把握しながら話す」を重視しながら、発声の工夫をしたり、自分が理解できるまで読み、鏡の前で練習します。	3.3 3回目で、自己評価が低いので、これからの評価を上げるように練習していきたい。
E		2.9 緊張でほとんどとんでしまって、頭が混乱してしまう。前回も今回も、文章を理解したつもりだけど、丸覚えをしたせいで忘れてしまったと思うので、単語というか、ポイントを覚えてアドリブもちょっと入れた方がよいと思いました。	3.1 今回、先輩たちの話を聞き、さすがだなあと思った。話し方がはきはきしていて、周りがよく見えているんだなあとと思った。最近の発表では少しずつ話せるようになったかなと思う。これからもっと実習に向けて勉強していこうと思う。 → 辞退
	3.0 内容を理解することや、声の出し方など、自分のことで手一杯だったので、聞き手の様子を見れていなかった。みんなよりも全体的に少しだけ、スピーチがよくない。	2.8 みんなよりも、1と3の項目が少し劣っている。まず3をよくするためには、普通に声に出して暗記するよりも、身振り手振りで覚えてみる。1は3の克服の仕方とだいたい同じで首も振ってみる。	3.3 この前の発表では、声は通っていたけれど、話している内容があやふやになっていた。そうならないためにも、話をする前に、何度か音読をして内容を理解したり、原稿文の文字をきれいに書いて読みやすい文で話に臨んだりすることが重要だと思う。
G	2.7 周りに対してはかなり甘めに、自分に対しては少しだけ厳しく評価する傾向にある。また、2の項目では、他より甘めにつける傾向があった。	2.7 周りに対してまだ甘く、自分はやや厳しく評価する傾向にあった。全体としてやや低めの評価なので、準備をきちんとして発表に臨み、余裕をもって周りへ気を配るようにする。やるという意識をしっかりとつ。	3.5 自分に対して、まだ厳しく評価する傾向にある。周りに対しては、甘すぎずに評価できた。全体としてまだ甘めにつけている傾向があるので、そこを考慮して評価を見るようにしたい。

H	3.3	3.1	辞退
	自分に対しても、他人に対しても厳しくつけている。紙面を見ながらの発表は、やはり下を向きがちで、聞き手の様子を観察できていないと数値を見てもらえる。	暗記項目ということになっただけで、かなり内容の理解に苦しんだ。見る紙面がなくなったことで、聞き手の様子は観察しながら発表できたが、やはり覚え切れていないことにより、たどたどしく詰まりながら話すようになってしまった。「覚える」のではなく、イメージをもって内容をよく理解することが大切になる。	
I	2.6	2.9	4.0
	全体的に見て、どれもよくないという風に思えます。でも、他の人たちは、「抑揚をつけて話す」と「内容をよく理解して話す」について平均ぐらいつけてくれたので、思うほど醜くなくなったのかなと思います。	前回と比べて聞き手の方を見ながら話していたが、あまり伝わっていたなかったようなので、もっとゆっくり見渡しながら話してみようと思います。おそらく声の抑揚を変えるタイミングで顔を上げていると思っているので、併せてできるようにしたいと思います。	抑揚を変えながら、周囲の様子もうかがえたので、今までで一番良かったと思う。ですが、やはり全体的にうまくなりたいと思う。
J	3.7	3.7	4.1
	自分ではあまりうまく話せなかったように思ったが、意外とよい評価で驚いた。しかし、自分ができていると思っていた3については、自己評価の方が高かったのもっと文章を理解して(覚えれるくらい)、人に伝えていこうと思いました。気持ちを込めることが重要。周りを見る力はまだまだ足りないように思う。	平均点はそのままでしたが、全体を通してムラがなくなったという点では良かったのかと思う。が、自己評価とのずれがあるので、自分の感覚と人の感覚は違うので、なかなか難しいと感じた。上達するためには、場数を踏むことと、慣れること。「人前で話す機会」があれば積極的に取り組むようにして、道筋を立てて話せるように、伝えるようにする。	3回目で点数が上がっていたので、良かったと思う。2と3の他の人からの評価が上がっているのに対し、1が下がっているので、今後の課題として、聞き手の様子をしっかりと見て、わかってもらえるように話せるように毎日の会話の中などで、意識して心がけようと思う。
K	2.6	3.2	辞退
	自分には少し厳しくなってしまう。注意した点をやろうとするが、なかなかうまくいかないことは実感しやすい。		
L	3.7	3.4	辞退
	数値で見ると、自分は周りへの評価が少し厳しいですが、自分では甘い方だと思っていました。自分への評価は基本値が低いので、少しでも「よくできた」と思うと、ついつい高めに点けてしまう傾向があるようです。それは、他人への評価も同じで、とても高い人が出てしまって、平均的に点けていない気がします。	他者への評価は、全体の評価の平均と少し近づいたので、以前よりは平均的にみれたと思います。ですが表を見渡してみると、3か4がほとんどで、平均的すぎる傾向になっていました。まだ、他人に辛い評価を付けるのはとまどいがあるようです。対策としては、初めのうちに平均的な人物を見つけ、それと比較しながら評価していき、自分の中で納得できる結果にしたいと思います。	
M	4.4	4.6	3.8
	やはり、全然聞き手を見ていなかったと、自分でも思いながら話していました。内容をきちんと理解しておけば、原稿を見ないで多少いえたのになと思います。次回するときは、話す一通りの内容を覚えて、難しいことだらけですが柔らかくかみ砕いて聞き手に分かり易く飽きないしゃべり方がしたいです。あがらないために家でもイメージトレーニングをしてみようと思います。	イメージトレーニングをして練習して臨んだ。前回失敗して良かった。2回目の平均が上がっていてとても嬉しい反面、内容をよく理解して話す項目があまり上がっていないのが少しショックだった。沢山練習しても、いざみんなの前に出て話す時、いったい何を言っているのか自分でもわからなくなる時があるので、どうしたらいいのかを考えるべきだと思います。次回の課題は、余裕を持って話せるように、慣れていけるようにしたい。	徐々に自分の評価が上がってきて嬉しい。3回目となると、自分の悪いところ、良いところが見えてくるので、ちょっとずつでも反省して自分のためにつなげているんだなというところが数字になって分かりやすい。今日、集中の発表を聞いてさらに頑張ろうと思った。



N	3.7	3.2	3.4
	自分は、自分でよく観察しながら話していると思っていたけれど、実際はそうではなかった。声などには問題がないと勝手に思いこんでいたので、今度からはもう少し辛めに評価したい。	今回は全体的に評価が下がっていた。特に自分は抑揚をつけて話すという部分に対する意識が低かった。次回はとにかく相手に伝えようという意識をもって、しっかりと話したい。	前回よりも評価が上がっていたので良かったけれど、目線を配るということがまだできずにいるので、もっと意識できるようにしたい。 → 辞退
O	2.7	2.8	3.7
	すべての項目において、自分でつけた評価よりも全員がつけた評価の方が高いが、いずれも全員の評価点と同じかそれを下回っている。	評価をもらったうち、1以外の項目は評価が上がったが、周りに比べるとまだまだ劣る。改善するポイントにはたくさんあるけれど、いきなり全部に気をつけるのは少し難しいので、まず発表の時にどれか一つだけでもできるように、練習を重ねようと思う。少しずつできることを増やしていきたい。	辞退
P	2.8	3.0	2.5
	声は通りますが、人前に立つのに慣れず、内容を理解できずに真っ白になってしまいます。うわべだけになりがちです。	頭が真っ白になってしまうことには変わりませんでした。映像を見させていただいて、緊張が全面に現れていて、..リラックスが第一。そして、内容の理解です。	辞退
Q	2.6	2.8	3.6
	自分が内容を理解しているつもりでも、聞き手には伝わっていなかった。	前回と比べてほとんど進歩がなかった。 <u>前回のスタイルからがらりと方法を変えてみたけれど、まだまだ研究が足らなかった</u> と思う。また、自分が他人に付ける評価も甘くなっていて、次回からはもう少し考え、観察して評価したいです。今回学んだことは、 <u>スタイルを変えるのは自分の中で正解だ</u> と思っていたけれど、 <u>暖めたりなくて評価が伸びなかったこと。</u>	自分の中ではできていたと思っていた項目でも、他人の目から見ればそうではなかった点を反省した。今回は、前回よりすごく点数が上がっている。多分、場慣れしてきたこともあると思うが、 <u>改善しようとしたことが反映されていて嬉しかった。</u> 今後の課題は、 <u>一番点数の低い内容をよく理解するように</u> していきたい。
R	2.8	3.0	3.7
	全体的に平均より低めで、1についてはかなり低かったので、次回からもっと聞き手をよく見ると、 <u>毎回やってしまう左上を見る癖をなくすように努力しない</u> といけません。下を向いて話していたので、声が小さくなってしまった。もっと前を向くようにします。	1は前よりも良くなったかもしれませんが、まだ前を向けていないと思うので、次も意識したいです。3については低くなっていたのが原因だと思えます。もっと内容を忘れないぐらいにしっかりと覚えて、話すときもはっきりしゃべるようにします。	紙を見ながら話をしたので、3については良くなっていたし、話し合いながらグループで決めたりしたので、よく理解できたとは思いますが、話し方が暗いのか、次回話すときは、明るくというか笑顔でやってみよう。
S	3.5	3.1	3.3
	自分の発表しているとき、文章を長くまとめたために、話す時間が長くなり、少しあわてて話したことが最大の欠点です。その他は、聞き手の様子が自分の話すのでいっぱい、あまり見ていない。自分を快く評価しているのではなく当然の結果だと思えます。	下を向いて思い出しながら話していた。声も小さかったと思えます。 <u>単語だけを覚えて理解し、相手にどうやって分かり易く伝えるかを考え、相手の方を向き、身振り手振りを加えて話すことが対策として必要だ</u> と思えました。	人前で話すときの緊張感は少なくなって、相手に伝わるかを考えながら話せたかと思うのだが、まだまだ話すスピード、言葉の間隔、身振り手振りなどを加えていないように感じたので、その点を重点的に直すようにしたい。
T	3.1	3.1	3.7
	人に対しても甘く評価するが、自分には平均的もしくは辛く評価している。みんながつけてくれた評価は、だいたい平均的だったのでもう少し頑張りたいと思った。自分を甘く評価しないでこれからも成長したい。		辞退
U	2.4	2.8	2.1
	みんなの評価に対して、自分は2は高く点ける傾向があり、そして3を低くする傾向があると思う。		辞退

例えばRの場合は、1回目から「毎回やってしまう左上を見る癖をなくすように努力しないといけない、下を向いて話していたので、声が小さくなってしまった。もっと前を向くようにします。」と記述しており、2回目には「もっと内容を忘れないぐらいにしっかり覚えて、話すときもはっきりしゃべるようにします。」、3回目も「次回話すときは、明るくというか笑顔でやってみたい。」と具体的な対処方法をイメージしており、意欲的な改善の姿勢が見られる。

また、1回目から具体的な改善策を挙げているA、B、J、Rは、回を経るごとに評価が上がっていることも見逃せない。

教員への向き不向き、また求められる力の過不足を説明することは難しい。また、それを自分で気づいたり見つけ出したりすることもなかなか容易ではない。しかし、この評価の推移をうまく使うことにより、自分の取り組みをチェックしたり、他人から見た自分を知ったりすることができるのではないと思われる。指摘されるのではなく、なるべく自分自身で目標を設定できる仕組みが大切なのである。飛躍的に伸びたこれらの学生たちの中には、当初力量不足を心配した者もいた。しかし、自らの課題を知ることによって、そしてそれを真面目に取り組んだことによって、評価の伸びに結びついたのであろう。具体的な目標を設定することの重要性が表れた好例である。

一方、興味深いのは1回目、2回目と全員の評価がダントツに高かったMで、表現力が豊かで発表の力も優れている学生だが、3回目では4位になったことである。他の学生たちが力をつけたことにより全体の評価が上がったとも考えられるが、評価の基準自体も変化したと考えられ、今後も推移に注目していきたいと思っている。

PとUは残念ながら教職を辞退したのだが、具体的な目標の設定ができなかった、あるいは不足している力を補うには大変な努力や時間が必要であると気づいたと考えられる。辞退者は、2回目から3回目の間に4名、3回目の評価後3名、その後2名出たが全員が自主辞退であった。この「自他評価システム」が、教職への適性について考えるよい機会になったのではないかと捉えている。

## エ 「教職実践演習」及び「教育実習事前事後指導」への「自他評価システム」の導入

2回生が教育実習後に受講する「教職実践演習」では、2回の集中講義（資料4）とリンクした内容で実施している。1回生は教育実習の事前指導として、2回生にとっては教育実習の事後指導になるが、今年度はそれらを合同で行うことにした。2回生は、互いの教育実習での体験を共有する機会にするとともに、1回生にその苦勞や充実感を少しでも伝え、次年度の参考にしてもらおうということである。

### a 評価の分析

グラフ2「評価の推移」は、2回生の後期「教職実践演習」で行った他者評価の推移である。

1回目は、1・2回生合同集中講義において教育実習体験の発表者を5、6人に絞るための予選会である。教育実習の体験発表は、様々な苦難を乗り越えたという充実感や、実践でもまれて自信がついたせいとか熱のこもった発表が多く、全体の評価平均は4.3と大変高くなった。体験を話したいという思いが強かったのか、大半の学生が10分という予定時間を大幅に超え、中には18分に及ぶ者もいた。

代表者の選考では、「分かりやすく話すことができる」の項目も重視し、A、E、F、H、L、Mの6名に決定した。

また、発表者へのコメントをコピーして全員分綴じ、集計結果と共に返却した。そのコメントを参考に2回目の発表に臨んだとの感想を聞くこともでき、目標設定のよい資料になったようであ

る。

1・2回生合同の集中講義では、6名全員が熱の入った見事な発表を行い、1回生たちに教育実習の困難さや、それを乗り越えたという気概が伝わったようで、感想には教育実習の大変さに自分が耐えられるかという心配とともに、事前になるべく多くのことを学んでおく必要があるとの感想を見ることができ、合同での成果があった。

2回目は、同じく1・2回生合同の集中講義での介護等体験の発表者を決める予選会の時に行った。平成10年に義務づけられたこの介護等体験は、教員免許状の取得において必修であるが、貴重な経験をたくさんできる良い機会となっている。

2回生の代表者の選考については、教育実習の時と同様に行い、1回目の自他評価がどのように作用したかを確かめることにした。その結果、1回目の代表者に選ばれなかった学生の評価の伸びが見られた。1回目の自他評価の結果や自己改善への対策と目標の設定、さらに他者からのコメント短冊などが功を奏し、改善のポイントの明確化に結びついたと考えられる。また、同級生の奮闘ぶりに、自分も負けておれないといういい意味でのライバル心が芽生えたと思われ、2回目はメンバーを総入

#### 資料4

#### 教育実習 事前事後集中講義（教職1・2回生合同）

1回目	教育実習を終えて	2回目	介護等体験を終えて
体験発表を通じて授業力を養うとともに、後輩のモチベーションを高める。			

<b>全体説明</b> （12:50-13:00）				
<b>発表（第1部）</b>		司会：〇〇 〇〇		
13:00-13:15	1	〇〇 〇〇	テーマ	介護体験での心構え
13:20-13:35	2	〇〇 〇〇	テーマ	助けすぎない
13:40-13:55	3	〇〇 〇〇	テーマ	思い切って積極的に
<b>グループ協議</b> （14:00-14:30）				
班	役割		メンバー	
1	司会：〇〇 〇〇 記録：〇〇 〇〇		1回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
			2回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
2	司会：〇〇 〇〇 記録：〇〇 〇〇		1回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
			2回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
3	司会：〇〇 〇〇 記録：〇〇 〇〇		1回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
			2回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
4	司会：〇〇 〇〇 記録：〇〇 〇〇		1回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
			2回生	〇〇 〇〇、〇〇 〇〇
<b>発表（第2部）</b>		司会：〇〇 〇〇		
14:40-14:55	4	〇〇 〇〇	テーマ	自分にできることをする
15:00-15:15	5	〇〇 〇〇	テーマ	自分から学ぼうとする
15:20-15:35	6	〇〇 〇〇	テーマ	相手を知る
<b>まとめ・連絡</b> （15:40-15:55）				

れ替えにし、B、C、D、G、K、Nの6名を選考することにした。

2回目も概ね1回目と同じ流れであるが、途中に30分の合同グループ協議を挟み、質疑応答や交流が行われやすいようにした。本学では、1回生から6つの専門コースに分かれるため、他のコースとの交流が少ない。教職履修生においても同様であったため、1回目のグループ協議ではぎこちなさもあったが、先輩たちの熱意も伝わって2回目はどのグループも活発に意見交流が行われた。少人数で構成されている本学のような学校では、このような取組の重要性を確認できるよい機会になった。

3回目の自己評価は、学習指導案の改善発表時に行った。これは、教育実習の研究授業で使用した学習指導案を大学のフォーマットに移し替え、後輩たちのために蓄積していこうというもので、全5回である。

内容は、1・2回目はグループ協議、3回目は改善発表、4・5回目は改善した指導案の作成とデータ化である。自分の指導案と他の指導案を見比べ、それぞれの特徴を知るとともに、各自の指導案の改善点を検討し、より完成度の高いものにすることが目的である。

一つの指導案を何度も吟味して改善を繰り返す行為は、実際に教壇に立って授業を進める上でとても大切なことである。在学中に、できるだけたくさんのネタをもたせたいと思っている。

この3回目の改善発表会は、3～4名による2回のグループ協議で検討した改善点を5分間で発表するという方法で行った。1回目の教育実習体験発表や2回目の介護等体験発表では、全体の評価が高くなりすぎ、評価ポイントの設定レベルが容易すぎるといった問題点が明らかになったが、この3回目の発表では、端的に自分の考えをまとめたり、要点を上手く人に伝えるという必要が生じたので、当初の評価ポイントが適切な基準になったようである。

その結果、3.5～4のグループと4～4.5の2つの大きなグループに分かれるようになった。上位のグループは、発表内容や発表の様子から判断して、臨機応変に様々な問題に対応できる資質をもっていると考えられる。また、下位のグループでは、基本的な話したり伝えたりする力が不足していると思われるので、できるだけ具体的な目標を立てて改善していけるように指導していきたいと考えている。

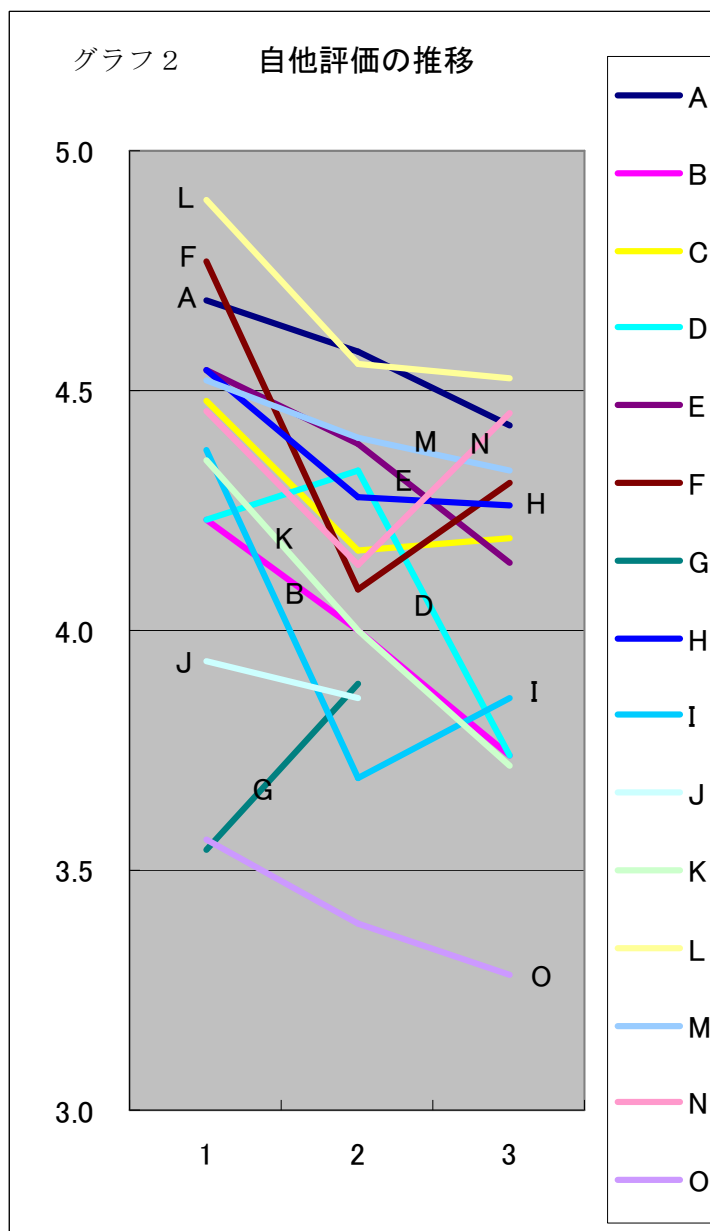


表 4

## 分析と今後の課題

	1回目	2回目	3回目
A	4.7 声は比較的大きく出せていた。分かりやすさはまあまあ。もう少し周りの様子を見ながら話すことができるようになった。	4.6 以前よりも「わかりやすく話せている」の項目の評価が少し上がっていたので良かった。「周りの様子をよく見ながら…」の評価は以前と変わらなかったが、自分としては以前よりも周りの様子を落ち着いて見ながら話すことができたと思う。「大きな声」は、評価が少し下がってしまったので、今後は音量に気をつけていきたい。	4.4 落ち着いている、周囲の様子を見ながら話すことができているという点は、前回と同様評価してもらえた。ただ、 <u>声が以前よりも小さくなっているという指摘を受けてしまった。また、抑揚をつけた方がいいというアドバイスもあった。</u> わかりやすさプラス声の大きさが適切なスピーチをしたい。
	4.2 話す内容をもう少しまとめるべきだった。時間を気にせず話してしまうところがあるので、時計などで時間を確認しながら発表できるようにしたい。	欠席	3.7 手元を見ながらの発表になってしまっていた。1時間の中にたくさん内容を詰め込んだ授業だったので、もう少し必要などころに絞って発表すればよかった。緊張するとどうしても早口になってしまっているの、落ち着いて話せるよう慣れていきたい。
C	4.5 やはり声が小さかったと思う。内容が少しとりとめなかったと自分では感じたので、全員の評価は意外だった。点数の付け方としては、皆に対してもう少しから目になっているかもしれない。でも、皆は自分を過小評価しているとも思う。これからは、もっと声の大きさを意識したい。内容も時間内に収まるようにしたい。	4.2 全体的に、前回より低くなっている。私自身も他の人に対して辛めにつけた。しかし、やはり自分の評価は難しい。声は以前よりも意識したつもりでも、やはり小さいようだ。気をつけねばならない。周りをもっと見ることができたらと思う。見渡すというよりも、一点を見続けているようだ。	4.2 今回、自分に甘く他人に厳しくなっていた。自分の評価がまだできていない。落ち着いて、自分はどんな発表をしているのか、客観的に評価できるようにならないといけないと思った。大きな声をだしたつもりで変わっていないということは、反省する。 <u>自分なりに声を出したつもり、けれど小さいと指摘されているので今以上に意識しないといけない。</u>
	4.2 評価が自分の中だけになっていた。今までよりは良かったかもしれないけれど、他の人と比べるとまだまだだった。特に声の大きさは、自分で思うより足りていないようなので、次回は声に気をつけたい。	4.3 詰まってしまうところが多々あるので、落ち着いて頭の中で整理してから言葉を発するようにしたい。	3.7 まだまだ声の大きさが足りないの、自分がうるさいと思うぐらいに声を出していきたい。また、入念な準備がないと不安になってしまうのも直す。何も知らされていなくても、それなりに話せるくらいには余裕をもちたい。
E	4.5 声が小さかったようなので、次は気をつけたいと思う。また、話の内容をもう少しまとめて話すことができるように努力したい。	4.4 話の内容を、もっと聞きやすい分かりやすいようにまとめて話せるようにしたい。もう少し、周りの様子を気にしていけるようにしたいと思う。	4.1 もう少し、時間配分をうまくできるようになればと思った。 <u>何も無いところ</u> を見ているらしいので、話している相手を見ていくようにしていきたいと思う。
	4.8 自分で想像していたとおり、わかりやすさと様子をよく見て話すという部分に欠けていたと思う。自分の世界に入って話さないようにしたいと思った。	4.1 自分で思っていたとおり、前回よりもうまく発表できなかったことが分かります。自信をもって堂々と発表したいと思えます。	4.3 3回の発表で、毎回わかりやすさと周りの様子を見ながら話すことができていると思ったと思う。もっと堂々と自信をもって発表しなければと思う。
G	3.5 自分でもまだまだだと思うし、皆の評価もそうだった。次は、皆の期待をいい意味で裏切るような発表にしたい。いつまでも笑われてばかりではつらいので、頑張りたい。	3.9 話すたびに良くなっていると、手応えを感じるよい経験をさせていただいていと感じる。良い方向へ向かっていると感じるの、やりがいがある。	欠席
			今回は、前回よりも落ち着きをもって臨むため、今後も頑張って下準備をして挑み、今回よりもみんなにたくさんのお話を伝えられるようにスピーチしたい。

H	4.5	4.3	4.3
	「分かりやすく話せている」が弱い。聞き手を意識したまとまっている話にすべきだと思う。早口な点を改めたい。「周りへの視線」を気にすべきか。聞き手に配慮した発表を心がける。	話のまとめ、流れが上手くできるように努める。周囲が見えていないということは、手元、頭に意識が集中している証拠、ソラで発表できるようにすべき。	時間配分と周囲の状況把握を今一度省みる。時間はともかく、周囲へ注意を向けるには、回数をこなすのが最善と思われる。発表を会話と捉えてみる。
I	4.4	3.7	3.9
	自他共に比較的辛口に評価をしている。次回からは、自分の点数の基準をもっと具体的に位置付け、あまり厳しくなりすぎないようにしたい。	全体的に、評価が落ちているのが気にかかる。特に、3の項目の点数が下がっているので、手元のメモを見ないでも話せるように、内容をきちんと整理して頭に入れておくように努力する。	話す順序を効率よく考え、時間配分をしっかりと行う。また、話に抑揚をつけ、ゆっくりと聞き取りやすいように話す。「それ」「これ」や「あの」「えっと」という言葉を多く使わないように気をつける。
J	3.9	3.9	欠席
	全体的に平均的だと思う。だがもう少し周囲の様子を見ながら話せるようにした方がいいと思った。	今回、手元のメモを見るため、下を向いていることが多かったというコメントがいくつかあった。前回は周りの様子を見ているかについての評価が低かった。事前に話す内容を頭の中に入れておいた上で話すようにしたい。そうすれば、メモを見る回数も減り、落ち着いて話すこともできると思う。	事前に頭の中に話す内容を入れておいて、整理しながら話す。メモばかりを頼りにしないで周囲を見て話す。
K	4.4	欠席	3.7
	緊張してか、あまり皆の顔を見ながら話すことができていなかったと、自分でも感じた。次回は堂々と話せるように努めたい。	私は、時間がたつにつれて声が小さくなってしまふときがあるので、常に意識しながら発表することを心がける。話す内容をきっちりと整理しておき、相手に分かりやすく伝えるようにする。	生徒にどうすれば理解してもらえるか、どうすれば楽しい授業をしてもらえるかをよく研究しながら、声の大きさなど基本的なことも克服していくよう努力していく。
L	4.9	4.6	4.5
	<u>みんなのコメントを見て、反省点を指摘してもいいのではと？という意見があり、～すればいい。というアドバイスだけでなく、自分の反省を生かしてもらえるように伝えたい。</u>	「発表時の話す順序と時間配分」時間は、5分なら5分でまとめる！と意識するとできることだし、順序は事前の準備をしっかりとしていればできると感じた。内容については、発表を重ねるにつけ、気づき改善していきたい。	自分の発表をすることだけで精一杯にならないこと。目的は相手に伝えること。目標は、その発表を通して自分を成長させること。いかに相手に伝えることができるかに注意したい。
M	4.5	欠席	4.3
	周りの様子を窺いながら話をするように心がけていきたい。声ももっと出していけるようにしたい。	今回、欠席したので発表できなかったけど、またこのような機会があったときは順序よくゆっくり丁寧に話していけるようにしていきたいです。	少し早口で淡々と話してしまったと思うので、もっとゆっくりと一呼吸を置きながら話していきたいです。
N	4.5	4.1	4.5
	「分かりやすく話せている」については、自分ではまとまりのない話をしていて思っていたが、意外に評価が高くて驚いた。その一方で、「周りの様子をよく見ながら話せている」については、思った以上にできていなかったため、次回意識して取り組みたい。	前回と同じミスがないように努めたが、「もう少し視線を聞いている人に合わせて」といったコメントがあり、 <u>思った以上に私はできていないと実感した。まだまだ甘いところがあるので見つめ直したい。</u>	今までと比べて、話をまとめることができていたと感じた。評価を見ても、それを実感できたので大変良かった。周りの様子を見ることも、まだ甘いところがあるので気をつけたい。
O	1回目なので、声を出すことと、できるだけまとめて言うようにしました。その結果、早く発表が終わってしまったので、もう少し内容を濃く話せば良かったと思いました。	発表前に内容をまとめられていなかったため、分かりにくい発表だったのではないかと思います。話にメリハリを付けながら話せるようにしたら良かったと思います。	声がそんなに大きくないので、まず大きく話すことと、話が単調にならないようにしたいと思います。

## (2) 「自他評価システム」の改善と今後の活用

### ア 「自他評価システム」の課題

この評価システムを実施して、次のことが分かった。

- ・ 評価が上がった人は、具体的な目標（ゴシック体の箇所）を設定していることが多い。
- ・ この評価方法は、初期の段階に自分のことを知る必要がある場合に特に有効である。
- ・ 元々高いレベルの人は、数値評価の変化が現れにくい。
- ・ この評価システムの有効範囲は、同レベルの難易度の課題設定ができる範囲までである。

以上のことから、この評価システムは初期段階では大変有効であるが、レベルが上がるにつれ他の仕組みと複合していく必要があると感じた。例えば、2回生の教職実践演習では、自他評価シートへの記入の際に発表に対するコメントを記入させ、それらをまとめて切り取り、短冊にして評価集計結果と共に返却したが、表4の「分析と今後の課題」のアンダーライン部のように、これらのコメントを見て改善ポイントが明確になった者が多くおり、数値による評価と併せて文章によるコメントやアドバイスが、具体的な目標設定のための有効な手段になっていることが分かる。

コメントやアドバイスの記述及びその返却等の取り組みは、次年度の1回生「美術科教育法」でも是非取り入れたいと考えている。

### イ 「自他評価システム」の今後の活用

教員養成課程を担当して最も大きな課題だと思われるのは、本人が教職を自分の意志で選んでいない場合である。遅刻や課題未提出、意欲欠如などの行動が見られるので面談してみると、「親に言われてしかたなく教職を取っている」「教員免許の取得が入学条件だった」などが分かってくる。このような志望動機の場合はやっかいである。自分のことだという自覚がもてないので、話を聞いていても上の空である、他人事のような振る舞いや反応を見せる、打っても響かない、やる気が感じられない等の状況が見られる。教育実習や介護等体験などで、たくさんの人たちに関わっていただくことになるが、大変な迷惑をかけることになる。

次に困るのは、精神的に不安定な場合である。人とのコミュニケーションがうまくいかなかった、不登校を経験したことがあるなどで、本人は自分の体験を生かしたい、またそんな精神状態である生徒のことを自分なら分かってやれると思っている。あるいは、自分がそんな状態の時に、関わってくれた先生に憧れ、自分もそうなりたいと願う場合もある。しかし、自分自身がまだ完全にその状態から脱していないことが多く、大変難しいと思われる。実際に、それらの体験を克服して乗り越え、体験を生かして教員になられた方もおられるが、容易なことではない。

現時点で、能力や適性に多少問題があっても、動機や意欲さえしっかりしておれば、日々の努力によって解決していけると考えているが、それには「どうして先生になりたいのか」や「どういう先生になりたいのか」と、常に自分自身に問いかけながら目指す教師像のイメージをしっかりともてるようにすることが大切である。故に、1回生の前期の「美術科教育法」では、教員に必要な知識の習得と併行して、今回の「自他評価システム」などを用いて、教職への志望動機や適性を定期的にチェックできる仕組みを導入する必要があると考えるが、最も大切なことは、適切なタイミングでこれらを用いることであり、また迅速にフィードバックできるようにすることであろう。「鉄は熱いときに打て」である。

#### 4 おわりに

平成25年3月20日に、「教員養成教育の評価等に関する調査研究」フォーラムに参加することができた。これは、東京学芸大学が行っている研究調査プロジェクトで、2010年から4年間の予定で今年が3年目に当たり、各大学で行われている教員養成教育を、それぞれの多様性を損なうことなくネーションワイドに評価する基準と組織の構築を行うことが目的とされている。

2004年の学校教育法の改正により、全ての高等教育機関に機関別認証評価が義務化され、2012年には中教審より「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）」で、それぞれの大学の特徴がより明確に把握できる客観的な指標の開発等の重要性を指摘された。今回のプロジェクトはその流れの中で取り組まれたもので、教員養成教育の質的向上を図るための評価システムの構築によって、大学の特色づくりとともに各教員養成機関との連携をねらいとしている。

教育職員免許法施行規則第二十二条5では、教育課程の編成に当たって、教員として必要な幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならないとあり、教員養成評価システムの項目として学生が習得すべき知識技能の明確化とともに、教職への意欲や適性の把握を挙げていることに注目したい。

本研究においても、「自己評価システム」を用いて教職への適性を自主的に判断できるようにすることが大きな目的の一つであったが、近年増えている発達障害や学習障害をどう扱うかが難しいところである。今回のフォーラムの中でも取り上げられていたが、これらの障害を教職の適性判断の中に入れるかどうかについてはまでは言及されていなかった。

本学の今年度の教職履修者数の変化を見ると、教職説明会への参加者は49名、その約半数の23名が受講を登録、そして前期に7名、後期4名の計11名が辞退し、現在約半数の12名が残っている。辞退者のなかには、単なる低学力だけではない問題を多く抱えており、今後の大きな課題と考えている。

教職履修学生の意欲向上をねらいとして、現在「教職履修カルテ」を役立てているが、今後、教職科目を担当されている教員の方に、評価の際にコメントを付けていただき、それをフィードバックしていきたいと考えている。また、今回取り上げた「自己評価システム」を「履修カルテ」の中に組み入れることや、学内ネットワークを用い、これまでの紙面による記入・集計ではなく、各自の端末からデータ入力を行い、自動的に集計されるようなシステムを考えている。

今後、今回の研究結果を基に、さらに有効な手立てを考えていきたい。





